

山梨県南部町 正行寺蔵 「朝師記年録 全」

望 月 真 澄

【凡 例】

史料の翻刻作業にあたっては、原史料の体裁を尊重しつつも、読解の便を考慮して、以下のように改めた。

一、漢字は原則として常用漢字に改めた。ただし、特に必要と認められる場合については原史料のままとした。

一、字体は人名・地名等の固有名詞を除いて、常用漢字のあるものはこれを使用し、異字・俗字・略字は正字を原則として常用漢字に改めた。

一、平仮名で漢字に直せる文字は漢字に改め、平仮名の右側に（ ）を付し、漢字を示した。

一、変体かなは原則として平仮名に改めた。但し、助詞等慣用的に使用され、頻度の高い左記の文字については、漢字のままとした。

而(テ) 江(え) 者(は) 茂(も) 而已(のみ)

一、漢字に付されている振り仮名は、史料に振り仮名が付されている文字のみに限った。

一、再読文字は、漢字を「々」、片仮名を「ヽ」、平仮名を「ゝ」、二字続きは「く」とした。

- 一、朱書・後筆・裏書・裏筆・貼紙・墨書等は「 」で囲み、その旨を()で肩書に注記した。
- 一、落款については、□で囲み、刻された文字についてはその中に記し、肩書に(落款)と注記した。
- 一、虫損・破損・汚損等により判読できない場合、字数が判明する場合は□□□で示し、字数が判明しない場合は「 」で示し、その旨を()で肩書に注記した。
- 一、誤字が明らかかな場合は、右側に()を付して、正しい字を注記した。また、記載内容が疑わしい場合は(カ)、脱字がある場合は(脱力)、意味不明の箇所については(ママ)と肩書きに注記した。
- 一、平仮名で漢字に直せる場合は、右側に()を付して、漢字を記した。
- 一、本文には、読みやすくするために読点(、)・読点(。)・並列点(・)を付した。
- 一、史料閲覧に際して、史料所蔵者山梨県南巨摩郡南部町猪根三七一、日蓮宗正行寺住職清水随静氏には度重なる調査にもかかわらず、たいへんお世話になった。この場を借りて、その学恩に謝する次第である。

【解題】

〈「朝師記年録」の書誌〉

「朝師記年録」は、一冊十八丁、寸法は、縦二十三・九cm、横十六・二cm。

〈本書の内容〉

刊行した人物は、芝三田(東京都港区)に住む小原・田村・井口の三氏で、文政十年(一八二七)十月に刊行されている。これらの人物の詳細については現時点では知る情報がない。しかし、江戸の芝という法華信者や法華講中が

多い地域に住む人々であることから、法華信仰を持った人々であることが考えられる。本書刊行の趣旨も、日朝の眼病守護の御利益を感じ、「現世安穩、後生善処、宿福深厚」といった願文によって史料が締めくくられているところから、法華信者や寺院向けに刊行した書物であることを窺い知ることができる。

本史料は、裏表紙見返しに記されているように、明治三十二年（一八九九）一月に正行寺（山梨県南巨摩郡南部町猪根）三十一世日厚が所持していたものである。¹⁾ おそらく、木版で刷られ、日朝ゆかりの寺院に頒布されたものを日厚が所持するに至ったと考えられる。

日朝の伝記に関する資料は、全国各地に点在しているが、日朝ゆかりの寺院において、日朝とその寺院とのつながりを示すため、縁起として作成されることが多い。特に、日朝が三十八年間住持を勤めた身延山久遠寺の宝蔵・身延文庫には日朝自筆の典籍類が多く所蔵されている。²⁾ 一方、信仰の対象となる日朝筆曼荼羅本尊も、日朝開山となる寺院やゆかりの寺院に多く所蔵されている。

本書の内容は、日朝の生涯を描き、その後著書、ゆかりの寺院といった構成になっており、最後に眼病守護の功德が説かれている。身延山久遠寺三十六世日潮が記した『本化別頭仏祖統紀』では、生涯について詳細に記され、眼病平癒の祈祷法も記されているのが特徴である。また、毎月二十五日の命日に「唱題壹百遍、南無身延十一代日朝尊者と七遍」すれば眼病が平癒する、という功德を記していることが注目される。³⁾

身延山久遠寺（本院）の支院である覚林坊には日朝の廟所があり、現在も日朝信仰の拠点となっている。久遠寺における日朝の功績は、西谷から現在の場所に久遠寺を移転したことだけでも偉大なことであり、⁴⁾ 庶民信仰の上では眼病平癒の功德が法華信徒に広く知られているところである。江戸時代においては、久遠寺祖師の江戸出開帳

の折に、日朝像がご利益ある仏像として江戸に十回出開帳されている。³⁾そこで、文久三年(一八六三)の開帳記録より、その年に出された日朝像の縁起をみると、

日朝上人靈像並御本尊

是ナルハ当山十一代眼病御守護行学院日朝大上人ノ靈像並朝上人御認ノ御本尊也、夫レ人ノ身ノ六根イツレモ大節ナレトモ殊ニ眼第一ノ肝要也、日朝上人一千日ノ間法華経誦セ玉哲ヒテ立テテ曰ク、若シ末代眼病ニテ身心共ニ悩ム者アラハ、我ヲ祈リ日々題目ヲ唱ヘ南無身延十一代行学院日朝上人ト吾名ヲ称セハ、我必ス守護シテ眼病平癒ヲ得セシメ、尚ヲ将来ニハ仏知見ヲ開カシメント、二世ノ哲願ヲ立サセ玉フ靈像ナレハ、生前値遇ノ思ヒヲナシテ信心ニ御拜アラセマス。⁴⁾

と、日朝が一千日間、法華経誦誦を行った功德によって眼病が平癒したことが強調されている。そして、眼病に悩む人は、題目を唱え、『南無行学院日朝上人』と唱えれば功德があることが力説されていることから、これも仏祖統紀の記載を踏襲していると考えられる。

日朝ゆかりの寺院は、本史料に十六カ寺挙げられているが、末尾に三十四か寺と記されている。これらの寺院について、『本化別頭仏祖統紀』では日朝手創の寺として、十一カ寺、室住一妙『行学院日朝上人』では二十三カ寺としている。

日朝の著述をみると、本史料では十一点の書名を挙げており、これは著述の中でも主となるものである。『日蓮宗事典』では、日朝の代表的な書物として、関西遊学時代のものとして①「一代五時記」②「四宗要文」、日蓮遺文を蒐集し、書写したものと③「録内御書」④「録外御書」、遺文の注釈書として⑤「御書見聞」、法華経の注釈書として⑥「補施集」⑦「法華草案抄」⑧「法華講演抄」、宗義関係として⑨「弘教用心記」⑩「当家朝口伝」、当時行われ

た論議の記録として①「例講問答」②「三日講問答」、日蓮聖人伝記として③「元祖化導記」等があげられている。²⁾そこで、本史料と比較すると、①②⑤⑦⑩の五点が共通しており、後の五点も代表的著作に準ずるものであろうと思われる。

本史料における挿入図は、寺院の絵（不明）、日朝剃髮図、日朝葬送図、日朝廟所図の四点が挙げられている。

日朝伝を知る上で、本史料にとりあげられた場面をみると、釈尊伝や日蓮聖人伝に共通するように誕生・出家・修行・初転法輪・入滅といった生涯に関わる主な場面の絵が本文の中に挿入されている。つまり、本史料は、他の伝記に最低限記されなければならない場面が取り上げられていることになる。

次に、本史料に記載される日朝の生涯に関する記載事項を年表形式で紹介してみたい。

・ 応永二十八年（一四二二）四月八日 日朝懐妊

・ 応永二十九年（一四三二）一月五日 日朝誕生

・ 永享四年（一四三二） 檀林に入学（十一歳）

・ 同 五年（一四三三） 比叡山の学林に入る（十二歳）

・ 同 六年（一四三四） 日蓮聖人靈蹟を巡拝（十三歳）

・ 永享八年（一四三六）五月下旬 日出、本覚寺を鎌倉に建立（六月十七日と古書にみえる）とあり

・ 長祿三年（一四五九）四月九日 日出遷化（七十九歳）

日朝、三島本覚寺と鎌倉本覚寺を兼職

・ 寛正元年（一四六〇） 日延（久遠寺十世）、身延山を退院

日朝、身延山貫首(十一世)として入山

・寛正二年(一四六一) 四月二十六日 日延遷化

・明応二年(一四九三)

三島本覚寺へ行き、師日出の御廟を拝し、伊豆国宇佐美朝善寺の両親の御廟を参拝

・明応八年(一四九九)

日朝、退院し、東谷覚林坊に隠棲

・明応九年(一五〇〇) 六月二十五日 日朝、遷化(七十九歳)(在位四十年)

他に、本史料の特徴をあげると、十四丁表の半帳を割いて下田了仙寺が建立されたことを記していることである。ここでは、今村伝四郎正長が身延山久遠寺二十六世日暹に寺院建立を願ったということが如実に記されている。了仙寺の縁起をみると、下田奉行に抜擢された正長が、了仙寺の日朝像に徳川家康の眼病平癒を祈願し、効験があった。よって日朝を開山と仰いでいるとあり、地域においても由緒ある寺院といえる。

日朝伝に関しては、本史料の跋にもあるように、先に紹介した『本化別頭仏祖統紀』に記されたものが、日朝伝記の基本資料となる。他には、本史料で登場する日朝ゆかりの寺院の縁起・パンフレット類があげられ、日朝の靈驗譚が如実に記されている。本書の内容も、日朝の著作や身延山における功績、眼病守護の功德が主に記されており、日朝の偉大さと現世利益の守護神像が宣伝されている。いわゆる、日朝を守護神として法華信徒に宣伝するための内容が多く盛り込まれていることが江戸後期の守護神縁起の特徴といえるのである。江戸後期は、祖師信仰・鬼子母神・七面大明神といった守護神に対する信仰が高揚していく時期である。文政期という時代に身延山の守護神である日朝

伝記が江戸に住む人々によって刊行されたことは、江戸への日朝信仰の伝播を探る手掛かりとなろう。さらに、明治期に入ってゆかりの寺院僧侶に本史料が所持されていたことは、日朝信仰が明治期に入っても継承されていたことを知り得ることができるのである。

以上、史料紹介のように、現在管見できる日朝伝に関する史料は限られている。その中で本史料は、簡略に日朝伝を生涯・著作・ゆかりの寺院といった内容によって記した書物として評価される。よって、法華信仰を持つ僧侶や法華信徒に広く読まれ、日朝の眼病守護の靈験が本史料を通じて各地に浸透していったと考えられる。

日朝は、身延山の歴世であり、江戸時代以降身延山の守護神として信仰の対象となっていく。この日朝信仰の広がり、身延山信仰の地域伝播を掌握する上で重要になると思われる。さらに、法華信仰史説明の上において、日朝信仰が本末関係や師弟関係を通じて広がっていったのか。眼病守護といった御利益信仰によって地域に浸透していったのか。日朝信仰が地域の民間信仰と融合して展開していったのか。今後の課題となるところである。

最後に、今後の日朝伝説明の上で、二、三の問題点をあげてみたい。

1、本史料の各地の寺院・信徒における伝存状況である。どの程度頒布されていたのかを知ることによって、日朝信仰の広がりについて知る手がかりとなる。

2、各種の日朝伝に記される内容の取り上げ方である。また、刊行年や刊行者によって取り上げる内容や強調点が違うこともあると思われる。

今後は、日朝伝を説明する上で、日朝ゆかりの寺院に史料調査し、関係史料の発掘に努めていきたい。

註

- (1) 正行寺の住所の字名(漢字)は、加曾根ではなく、猪根であり、これは本史料欄外に「猪根」と後刻されている。また、山号も常永山ではなく円光山であり、史料欄外上部に「円光」と後刻されている。
- (2) 『身延文庫典籍目録 上』久遠寺刊に日朝の典籍類が目録として収録されている。現在の宝蔵の西蔵の約三分の一の収蔵史料が日朝の著作・写本・所持本となるもので、膨大な史料群といえる。
- (3) 『本化別頭仏祖統紀』二九七〜三〇〇頁。
- (4) 『身延山史』六三〜八四頁。
- (5) 拙著『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』一八二頁。
- (6) 文久三年「開帳記録」身延文庫所蔵。
- (7) 『日蓮宗事典』日朝の項。
- (8) 『日蓮宗寺院大鑑』。今村正長によって創建された了仙寺には、徳川幕府の将軍・徳川家光より朱印地が与えられている。了仙寺の寺紋が徳川家の紋である三つ葉葵となっていることから両者の関係の深さが窺えよう。

【日朝関係文獻】

- ・『日蓮宗事典』日蓮宗務院、日朝の項
- ・『日蓮聖人遺文辞典(歴史編)』身延山久遠寺、日朝の項
- ・室住一妙『行学院日朝上人』身延山久遠寺
- ・身延山久遠寺編『行学院日朝上人』大東出版

【日朝関係資料】

- ・『御本尊論資料』(臨川書店)
- ・『身延文庫典籍目録 上』(身延山久遠寺)
- ・『日朝上人伝』(本化別頭仏祖統紀)

朝師記年録 全

序

過し世の事見かごとく今につたわり、法花
經に帰依する因縁をむすふものひとり
よりしてふたりみた限りなき一切衆生わ
しの峯のみちふみて、朝尊師一代の行状を
しるして本化末法の有縁をちなみみる
事にあかず人をして隨喜のころを生せしめ
共利益をうる事、すくなからず、その厚德を
ひろへば、其道の祖たる人をたふとま
しめんに、しかしとて一乘經王に帰依の
あたり、此書に序するもまた因縁ある

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)
にあらさらめやとしかいふ

文政十丁亥年孟冬吉旦

東武聖坂一乗舎黙翁識

日銅居士

黙翁

(日朝聖人画像)

恭題 日朝大上人真影

晴旭輝々 除闇來真光再

見柔 和姿盤中 顯現別頭

字沙界多 鎮本法師深刹有

識台上 夢折門克 祖翁規

如今靈塔 存殊特眼病 呼レ名

析立 □

加賀阿闍梨日朝大上人紀年録

身延山十一世加賀阿闍梨行学院日朝大上人は、高祖大菩薩

御入寂より百四十一年に当り、後小松院帝の御宇称光帝

「(1丁ウ)

「(2丁オ)

「(2丁ウ)

石清水八幡御幸の年限、応永廿九壬寅年伊豆国宇佐美村に

誕生まします円応法主の長男鏡澄丸是なり。其頃同国

三嶋常在山本覺寺一乘院日出上人といへる、智行兼備にして

不惜身命の聖人あり。法界弘通専なりしが、衆生を利益せんと

欲して志願をたて、小濱の水辺に出では水行をなし、諸天善神に

誓ひを立合ふ。諸天へ禮拜一万度題目一万遍妙法華經

十部一七日折行し合ひ、弘通成弁一度は夢になりとも、高祖

大菩薩に値遇し奉る事を願ひ、朝夕の修行書つくしがたし。

時に高祖大土親り夢中に告て曰く、我を見と欲せば、伊豆国

網代宇佐美の郷を弘通すべしと夢覚て、感喜肝に銘し告に

任せ、東浦加茂郡宇佐美の辺を弘通するに、信心男女多かりし

中にも円応法主といふあり。日出上人を深く信仰して、門葉

称して万度上人といふ。円応法主は師の如くに尊敬す。我始て

天台真言の弁論を聞事得て、高祖大菩薩の教への妙解に

帰伏して、三册戒を信受す。願くは我附囑の輩も、聖人の化導を

受奉り、永く三途の苦海を脱れん事を願ふ。聊か徳を慕ひ、

供給せんと欲れ共、迷情俄に捨がたし。爰に長男鏡澄丸といふ

(身延山久遠寺図)

┌(4丁オ)

(日朝剃髮図)

┌(4丁ウ)

八歳の小童子を師の許へ侍せん。聖人甚だ歡喜して招き見るに、英達眸に溢れ、面貌端嚴なる相を見合、斜ならず悦び、手を携へ三嶋へ帰られ、朝夕鏡澄丸を寵愛する事限なし。

時に永享元己酉年四月八日文政十丁亥年迄、凡そ三百九十九年也。既に剃髮染衣の式を設けんとする時、聖人独盤水中を望み見に、日蓮の二字鮮に水中に浮べり。聖人奇異の想をなし飛去て拝し奉り、誠なる哉瑞夢疑事なし。本化

高祖再来ましますかと感涙袖を浸し、頭を低て師弟と云共、座を同ふする事を恐る。鏡澄師は学業の志深くす、陰を惜み意気悠遠にしていと、精力あり。敢て近よる者もなし。世上の

┌(5丁オ)

事業を離れ、経釈を学び、春の日の長きに怠らず、秋の日早々暮る事を惜み、夏の夜の明中すきにも、冬の夜の寒にも、眠食を志て、法理を磨、灯を日影に継て昼夜倦事なく、

自然の勤功顕れて、眼の至処義を尽さずといふ事なし。内典

外典に暗からず、諸宗の法問の意味を正しくし、世間出世の浅深を究て、邪正師の善悪を分ち給へり。永享四子年十一歳にして檀林へ入学し、弥妙智顯れ、論議に向ふ衆僧悉く舌を巻て皆退き、未だ幼稚にして文才学業に秀たると

風評嘆美せり。同五丑年十二歳にして比叡山の学林に入り、南都へ走り、天台・花嚴・法相・三論・俱舍・唯識の奥義を採

(日朝論議の図)

┌ (5丁ウ)

┌ (6丁オ)

(捨身図)

り、真言・禪門・律部を詳にす。叡山にては権実雜亂の綸終

日々なり。首座能化に至迄驚感するといへども、一山所化衆

未だ少年の文際にて、首座老僧等へ不敬の事を妬み、

悪の種々の詭計を構へて惱す事算へ難し。然ども御身に

恙なく帰山し給ふ。翌寅年に十三歳にして、高祖御難所

佐渡を始として御旧跡を巡拜し、夫より関東遊学弘通

專なり時に、後花園帝の御宇鎌倉管領上杉安房守

憲忠公に見参有しに、諸宗の異目釈尊の教へ権実弁へ

┌ (6丁ウ)

難しと有、師具に教化し給ふ。我祖は広く権実の終始を
分ち、自他の邪正をさとし、今末法の病る輩に、妙法の
良薬を与へて其意広大なり。我末弟に連り、高祖の

遺命を重んじ、身命を軽んず。妙法の甚深微妙なる

義を述させ、教化したまひしかば、管領憲忠公邪正の本

末とくと聴少僧たりと雖も、凡人ならずと賞嘆まします

才名日に増盛なり。夫より三嶋本覚寺へ帰山すとかや。

然るに身延山十世日延上人粗此事を聞しめされ、本覚寺

師弟共に身延へ招かせ給ひ、側遠く随從せしめたるに、

敬んで慈訓を受、才智發明にして宗教宗致を尋るに、

弁舌水の流る如くにして、少しも屈する事なし。貫主大に

驚き合ひ、自ら呼て神童と称す。日出聖人心躰清浄に

(寺院の図)

(日朝説法図)

信力を勵し、竊に鏡澄の本地垂迹を試んと、心を擬して
哲願力に住す。不思議に光明赫々として、本化高祖來臨

┌(7丁オ)

┌(7丁ウ)

┌(8丁オ)

┌(8丁ウ)

して衆生を利益し合ふ有様を親り拜し奉り、眼を開き
座辺を見に鏡澄一人なり。弥黙して退き思惟して、暫くも
同居する事を恐れ、本覚寺譲り、自身は他山を弘通
せんとし、既以後職を渡し合ふ。是より日朝上人と称す。
釈尊を日種太子と申奉るも深き意味あり。高祖御母
君は日輪蓮花に乗ずと夢見て懷孕し合ふ故、日蓮と
名乗合ふ。今又日朝上人母君応永廿八丑年四月八日の夜、
殊に仏誕生日朝日山頭を輝し、松柏枝を垂ると夢見て
懐妊となり合ひ、十月を満して応永廿九壬寅年正月五日
誕生し合ふ。諸山の頂に登りて弘通するに、万人頭を低て
刃向ふ者なく信伏随従する事、諸木枝を垂て靡が如し。
又は四海の唱導師と成合ふゆへに、別て朝の字を撰み合ふか。
又は有精非精の眼目陰氣の眠りを陽発し、朝日輝くに
驚き目を覚し万物鮮かなり。是六根の中には眼根第一
なりと常に眼病を患ひ合ひ、誓ひ有て兼て朝の字を
名乗せ合ふや、御深意恐れあり。且又三嶋本覚寺後職己来
日出聖人に三倍して、化益弘通盛なりと別伝中にも書残

たり。永享八辰年五月下旬日出聖人鎌倉弘通参会の節、

天台真言の法印問答ましまして速に勝利を得合ひて、

衆人憚伏して一字靈場建立す。今妙嚴山本覚寺といふ。

既に同年六月十七日なりと古書にも見へたり。其後朝師益

妙法広布を祈らせ合ひ、高祖大菩薩の御分骨をおくり、

諸人東身延と称し奉るも此ゆへなり。日出聖人弘化盛と

いへども齡七十九歳に及び、長祿三己卯年に四月九日遷化一乘

院日出聖人と号す。文政十丁亥年迄三百六十八年なり。日朝

上人出師の遺命に依て、三嶋本覚寺・鎌倉本覚寺兼職と

なり、廿四年の間御化導諸堂舎建立専なり。寛正元

庚辰年身延観行院日延聖人御退院ましまして、同二辛巳

年四月廿六日遷化し合ふ。成就院とも申なり、日延貫首兼々

遺命あり、一山こそつて日朝大上人の入山を願に依て、寛正元

庚辰年身延山御入山なり。御山日々に榮へ化風静にして

四衆歡喜し、法輪四方に薫し、広布妙法参詣日々に倍

増す。堂前院内等甚だ狭くして集會法用勤難し。是に

依て日朝大上人思惟し合ひ、諸天高祖江祈願し擁護あら

ずんば、大伽藍心の俛に成就すべからずとて、寸陰の暇誦経題目

御修行なり。既に来り助縁熟し求めざるに、諸財等聚り

告ざるに、諸人来て木を挽、石を割、峯を平げ、谷を塞ぎ、

鋤鉞絶間なく力を尽すもの、幾千万人と云数を知す程なく、

三堂諸院会合所等迄残なく藁をならべ、山容巍々堂々

として、恰も靈鷲山にも劣べき事なし。信心の行者絶なく

法味渴仰供養を励し、金言の如く後生を折たまふこと

肝要なり。釈尊一大事の秘法を、靈鷲山にして高祖大士江

附囑まします。既に御書にも日蓮が胸の内に秘し隠し

持てり。日蓮が胸の間は諸仏の入定の処ならん。舌は転法輪の

所、咽は誕生の所、口中は正覚の砌成べし。かゝる法花経の

住所なれば、争か靈山浄土にも劣べき法妙なるが故に、人

尊し人尊きが故に所尊しと申は是なり。然は一度参詣

心に懸、御山江望まん輩、無始の罪障たちまち消滅して、

三業の悪を転して三徳となさん。彼中天竺無熱池に臨む

腦者が、心中の熱氣を除癒して充滿無願如清凉池と嘯

しも、彼是異なりと雖も、其意は争かかわるべき、彼月支の

「(10丁ウ)

「(11丁オ)

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)

靈鷲山は、本朝此峯なりと遊ばし候御書あり。然は法会の
楽律衆徒の行事の義式等に至迄悉く備へ、今祖山の

祖山たる其厚德は、全く日朝大上人にあり。山務の勲功

莫大にして算へ難し、明応八己未年御退院、東谷に御隠蔵

を築く、今の覚林房是なり。御生涯御著述等その外

寺院再建新建立数多く、明応二丑年には三嶋江下向

まします、日出師の御廟を拜し、師の御恩を謝せんと思召、

常在山本覚寺をして関八州の唱導師に任ず。夫より伊

豆国宇佐美御両親御廟所を拜し、一字御建立父尊靈

朝善位、母君妙秀尊尼、依て妙秀山朝善寺といふ。読経

首題の御廻向今に怠慢なし。然に御弟子日恒聖人と云あり。

常に日朝尊聖の高徳を感じ、自ら朝尊前の御影像を

彫刻し奉り、御滅後在すが如く崇敬し、人にも又拜させんと

此由を願ひ、開眼まします。朝尊曰く、日恒は我形をよふぞや

刻めり。然に我若き時より学業の為に法理を磨き、諸寺

諸山に於て、諸人に妬み疎まれ、災難数多し。いよいよ書籍に

眼を曝し、昼夜絶なし。既に危き事有しが、其目甚清淨

「(11丁ウ)

「(12丁オ)

にして金言のごとく恙なし。目は是人の精華にして、能其徳を
あらわす。我滅後此經を受持し奉る諸人、たとひ眼病を煩ふ
とも、信心無礙ならんものは、忽ち眼根清浄なる事を得させん。
題目息事なかれ。此願ひ空しからずは、我滅後三日を置棺
を發べしと、日恒始め信男女、棺を發き見合ふに、遺命に
違わず、両眼明らかにして眼晴栄々たり。敢て疑ふべからず。
時に明応九庚申年六月廿五日示寂し合ふ。在位四十年
御寿七十九歳なり。然に眼病御守護は、現証の御利益
日に増著し中にも、元和の初、神君御登坂の節、恐れ
多くも御眼病御悩甚しく、御療用御祈願並びに驗シ無

(日朝葬送図)

┌(12丁ウ)

┌(13丁オ)

(日朝廟所図)

┌(13丁ウ)

御家臣今村傳四郎正長といふ臣常に法花經を信じ、
就中日朝大上人の眼病守護御利益現証まします事
信仰一方ならず。神君の御眼痛、立所に利益感応まし
ます事に候はゞ、下関後報恩には、法華經靈場一字建立

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)

いたすべしと大願を起す。其日終らざるに、御悩迷に癒させ

合ふ。神君御悦び限りなく、御信仰ましく合ふ。御信心の

俾御大用濟せられ、御帰府後正長上意を承り、身延廿六

代智見院日通聖人江右の由申入、伊豆国下田法順山

了仙寺を御建立、日朝大上人の尊像を迎へ、読経のため

のふ御朱印頂戴有事、諸人知所也。然ば今眼を悩む輩、

日朝尊者の一軸をも掛奉り拜すへし。明応九六月

廿五日化し合ふ。朝尊者在が如く信心を凝し、朝夕たゑ

なく、題目執行怠りなく渴仰する時は、百度の御利益

決して疑ふ事なし。かかる不思議の靈験を、世々に伝へずんば

咎なるへしと、古き書籍を翻訳して、利益心験の法雨を

世々に溜ぎ、其目甚清浄の素懐を披かしめ、自他宗に

限らず、眼病を患ひ悲しむ信男女、題目を怠らすあゆみ

を運びたまふ時は、心験あらずといふ事なし。御生涯之

御行状九牛が一毛を挙て云爾。

身延山御在住御誕生の御著述目錄荒増を記す。

○天台真言教観解

○俱舍唯識評注

「(14)丁ウ」

「(14)丁オ」

○別頭五大部

○一大五時記

○御書見聞書

○法華草案抄

○弘經用心集

○四宗要文

○十不二門見聞抄

○元祖化導記

仏闍草創再建の寺院の荒増をしるす。

○伊豆国三嶋常在山本覚寺御剃髮の靈場なり。

○甲州八代郡得林山法成寺 ○同国巨摩郡加曾根村

常永山正行寺 ○同国東川内車田村鉢具山法円寺

○同国成嶋村妙寿山仏成寺 ○信州伊奈郡山室

妙朝山遠照寺 ○串田村寶上山妙藏寺

○古沢村常栄山本照寺 ○相州海老名長商山海源寺

○愛名村長登山妙昌寺 ○同栗原村長光山法泉寺

○伊豆国下田法順山了仙寺 ○同国宇佐美村妙秀山

朝善寺御両親御廟有とかや。恵日山ともいふ。

○武州町田久住山宏善寺 ○駿州府中身延山触頭

常在山感応寺始日向師開基中絶其後岩越氏感

応院淨円再建朝師を開基とす。○鎌倉妙藏山本覚

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)

「(15丁才)

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)

寺朝師開眼御化導の恵比須勸請あり。

新建御生涯三四十ヶ寺とも聞及ぶあらましを記す。

○鎌倉恵比須橋妙巖山本覚寺三島本覚寺御兼帯

之砌、児来て案内す。尋るに吾は西宮恵比須也。依て昔は

児堂と書、及びす堂といふともあり。其外奇なること

多し、高祖御分骨し合ふ、東身延と云也。在住読経

十二万部余之修行、御著述類、再建新建等三十ヶ寺

余、其外御生涯行状九牛一荒増之略伝也。

跋

仏祖統記朝師の伝、その碩徳をしるす

事詳なりといへとも、文章古雅にして、愚供

にさとし難し。爰に聖坂黙翁と居士輩に

読経之余の暇、朝師の行状本末をかき

綴り、紀年録と名く。実三三百有余年

前のむかし、歴々として見か如し。因より我等

異体同心なれば、深く朝師眼病擁護の

「(15丁ウ)

「(16丁オ)

「(16丁ウ)

「(17丁オ)

利益を感じ、其厚德の空く埋れん事恐

れ、梓あずきに鋳ちりほて世々に伝つたへ、信男・信女をして

現世安穩まゑ、後生善処ごせいぜんじょ、宿縁深厚共

に一乗のむしろを同し、靈山れいざん値遇ちぐうの縁を

結ん事を願ふ。南無妙法蓮華經。

文政十丁亥年

芝三田 小原氏

孟冬

田村氏

井口氏

(裏表紙見返)

維時明治三十二年初春

(裏表紙見返墨書)

「 圓光山正行寺

三十卷世

紫金跡初祖

文照院日厚代

」

山梨県南部町 正行寺藏 「朝師記年録 全」(望月真澄)

「(17丁ウ)

山梨県南部町 正行寺蔵 「朝師記年録 全」 (望月真澄)

「(18丁オ)

「(18丁ウ)